

3

育ててる入試

職員の面談が高校生の心に火をつける

追手門学院大学

高校生が自分自身と向き合い、大学で学ぶ姿勢を育てていく追手門学院大学の「アサーティブプログラム」と「アサーティブ入試」導入から3年目を迎える今、志願者数や学生の質は変化しているのか。アサーティブオフィサーの志村知美氏に話を聞いた。

成長した姿に一喜一憂、  
教育者冥利に尽きる

「こんな面倒な入試、高校生が受けるのだろうか。」

「アサーティブプログラム」と「アサーティブ入試」の導入説明の後、懸念されたことでした。確かに、前例のない日本で初めての入試形態です。一体どれだけの受験生が集まるのか、不安でした。それでも、高校生を信じていることから始めるしかなかったのです。

2014年5月、初めてのアサーティブガイダンスには、46人が参加。そのうち22人が個別面談を受けました。チャレンジャーな高校生に出会い、ワクワクした気持ちは今でも忘れられません。2年間の実施を終えた今、声を大に

して伝えたいことがあります。「こんな面倒な入試、たくさん高校生が受けています。」

高校生一人ひとりと職員が向き合い、大学で学ぶ意味や主体的に学ぶ姿勢を育てるプログラムを導入した背景には、「自分は不本意入学です」「偏差値でこの大学を選びました」という学生に出会ったからです。

オープンキャンパススタッフやインターンシップなどで活躍したアサーティブ1期生の話を耳にし

たり、学内でばったり会うと本当にうれしくなります。高校時代を知っているだけに、ちょっとした成長にも気がつくことがあるからです。なにより、学生が「大学が楽しい」と話してくれることが、「アサーティブプログラム」と「アサーティブ入試」導入の大きな成果です。自ら考え、決断して入学してきた学生の強さを感じます。彼らが成長をしていく姿を肌で感じる事ができ、うれしく思うのは、受験生としてではなく、1人の人間として向き合っているからだと思っています。

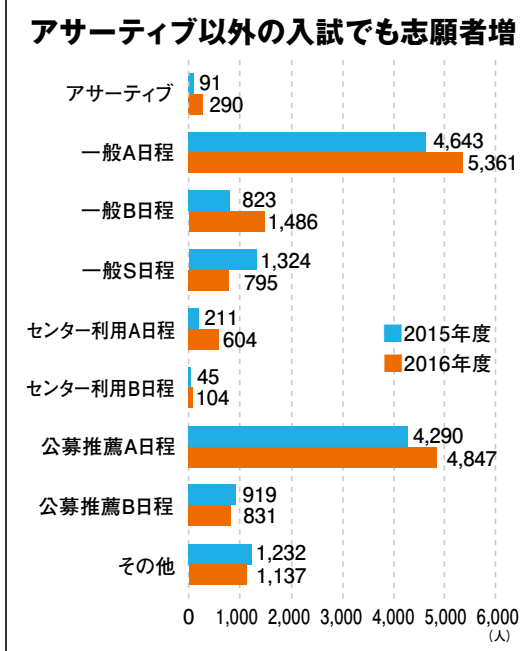
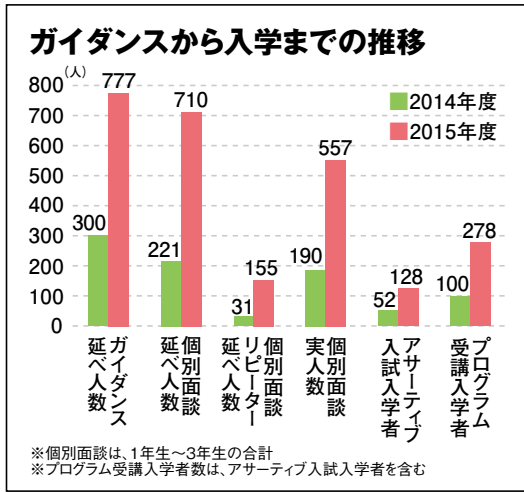
大学職員も教育者であり、  
教育に携わるべき

「アサーティブプログラム」と「アサーティブ入試」は、ガイダンスをはじめとするほとんどの工程を大学職員が担います。さまざまな部署の職員が「アサーティブ面談職員」として、このプログラムと入試を支えています。2年間で、全体職員の約半分にあたる54



入試部アサーティブ課課長 志村知美

しむらともみ ●2013年1月より追手門学院大学に勤務。同年3月名城大学大学院大学学校づくり研究科修了。2014年4月よりアサーティブオフィサーとして、アサーティブプログラムアサーティブ入試の企画開発から実施まで全工程に携わる。2016年4月アサーティブプログラムの開発に伴いアサーティブ課長に就任。アサーティブ研究センター研究員も務める。



年6月、アサーティブ研究センターが設置されました。「アサーティブプログラム」を基本とした「アサーティブ入試」の制度を一層確かなものにする必要があると考えたからです。センターの設立により、このプログラムと入試の実践と教育学や心理学などの面から理論的に裏付けることが可能となりました。そして、2016年4月から「学生の学びと成長のプロセス」を明らかにし、入学前から入学後にかけての学びと成長を追跡するため、総合的なアセスメント手法とそれに基づく成長要因のモデル開発を目的として、ベネッセ教育総合研究所との共同研究も始まりました。

人が、面談職員となりました。面談職員は初めに、最近の高校生の実態や個別面談の心得などの研修を受け、入試が終わると面談体験を共有して、次年度の改善に役立てるためケースカンファレンスも実施します。面談職員は、年齢や性別、所属部署などできるだけ幅広くなるよう構成しています。高校生に多様な大人と接する機会を提供したいと考えていたからです。

職員にとっても、「今」の高校生を知る機会にもなります。「自分が高校時代の時は…」と自分基準ではなく、目の前にいる高校生の基準からスタートした教育支援ができるようになり、そして、そのために必要な教育改革への具体

的な施策を提起できる力が、これからの大学職員に求められるのではないのでしょうか。「アサーティブプログラム」と「アサーティブ入試」は、高校生を育てるだけでなく、職員が、人を育てる尊厳や怖さ、そして喜びを体験し、教育機関で働く「誇り」を育む場にもなるよう願っています。

県教委や他大学と連携  
入試改革のその先へ

私たちは、「入試は教育の一環」であると捉えています。そして「入試」は、高校から大学へとつなぐ重要な接続ポイントだと考え、本来の入試に耐え得る「受験生」を育てようとしています。2015

さらに、2015年3月には、滋賀県教育委員会と連携協力協定を締結しました。今後、県教委が指定する5校の県立高校の高校生を対象に、多様な学習機会の提供として「アサーティブプログラム」を中心に取り組みます。「アサーティブプログラム」を入試のため

のプログラムとして位置付けず、育成のための「教育プログラム」としたことで、個別大学への進学誘導ではなく、幅広く高校生に進路を考えるきっかけとして活用できると判断していただけたのだと考えます。大学で学ぶ意欲や基礎学力を育てていくためには、高校の協力が不可欠であることは、経験からも実感しています。「アサーティブプログラム」を基本としたうえで、個別高校との連携の在り方次第で、それぞれの接続プログラムを構築できると思います。

今後の展開の一つとして、「アサーティブプログラム」を他大学と連携して実施ができないかと考えています。まずは、包括連携協定を結んだ北海道科学大学とアサーティブの取り組みをどのようなかを相談したいと考えています。2016年3月、文部科学省の「高大接続システム改革会議」の最終報告が公表されました。高校教育、大学教育、大学入学者選抜を通じた高大接続システム改革が提起されましたが、私たちは、目の前の高校生や学生をしっかりと受け止めて、独自の入試改革に取り組んでいます。入試改革から広がった高大接続は、新しいチャレンジの幕開けでもあります。



追手門学院大学 ▶1888年に高島綱之助が大坂信託社附属小学校創設 ▶6学部8学科。学生数は約6500人 ▶2016年に大学創立50周年

※本誌2015年6-7月号でも追手門学院大学を紹介しています。バックナンバーの記事は「Between情報サイト」で閲覧可能です。http://between.shinken-ad.co.jp